

与野南小だより

7月号 令和3年7月1日発行 第4号



【児童数】計293名

学校 Web ページ <http://yonominami-e.saitama-city.ed.jp/>

さいたま市立与野南小学校 電話831-0157 FAX831-0122

命

校長 鈴木 晴雄

梅雨の晴れ間の太陽は、真夏の輝きを見せ、プールでは、子どもたちの笑顔の中、水しぶきがあがり活気にあふれています。

6月24日(木)には、助産師4名の方を指導者として、「さいたま市思春期保健教室」を実施しました。第4学年の児童が、保健学習(「思春期の心と体の変化」)において、命の大切さや性に関する正しい知識を学び、自他ともに、その存在を大事にすることを考えました。以下は、児童の学習感想です。

「思春期ということが何なのかわかりました。」

「今日の授業で不安がなくなり、心が軽くなりました。」

「赤ちゃんの始まりがあんなに小さいのを見てびっくりしました。自分でも『立派に成長したな』と思いました。」

「命がとても大切なことを知りました。」

授業中、子どもたち一人ひとりに、実物大の赤ちゃん(模型)を抱く場面がありました。体を強ばらせながら恐る恐る抱く姿、優しい眼差しで赤ちゃんの瞳を見つめながら抱く姿。そこには、「命」は何物にも代え難いものであることを共有する時間が、静かにゆっくりと流れていました。

命

命はとても大切だ
人間が生きるための電池みたいだ
でも電池はいつか切れる
命もいつかはなくなる
電池はすぐにとりかえられるけど
命はそう簡単にはとりかえられない
何年も何年も
月日がたってやっと
神さまから与えられるものだ
命がないと人間は生きられない

でも「命なんかいらない」と言って
命をむだにする人もいる
まだたくさん命がつかえるの
そんな人を見ると悲しくなる
命は休むことなく
働いているのに
だから
私は命が疲れたと言うまで
せいいっぱい生きよう



この詩は、長野県立子ども病院で病気と闘っていた、小学校4年生の宮越由貴奈さんが書いた詩です。由貴奈さんは、この詩を書いた4ヶ月後、わずか11歳で人生を全うします。原文では、「せいいっぱい生きよう」という最後の文の文字が、大きくなっています。由貴奈さんにとって、「せいいっぱい生きる」とは…。

子どもたちは、日頃、命について深く考える機会はありません。また、子どもたちは、ゲームで生死を簡単に操作したり、生命を軽んじる言葉を躊躇なく使ったりする姿もあるでしょう。さらに、日常生活の中で、些細なことからけんかをし、相手の傷つく言葉をつかっている場面に出くわすこともあります。

人間の誕生の喜びや生きることの尊さ、ともに生きることの素晴らしさなどを考え、自他の生命を尊重し力強く生き抜く南っ子を学校・家庭・地域が連携して育てていけますよう御支援・御協力をよろしくお願いいたします。1学期も残り14日となりました。学校そして子どもたちを支えていただき深く感謝申し上げます。